

パ
パ
が
マ
マ
に
な
る
日

作 添谷泰一

登場人物

須藤 翔 (12歳) 33歳)

須藤 翼 (10歳) 31歳)

須藤和夫 (和子 40歳 72歳)

前ママ

ケンちゃん

ヒカル

看護師

職場の人1、2、3

上司

弥生先生

武

ヤス (武の子分)

タツ (武の子分)

遥

武の父

武の母

運動会の観客

町内会長

遥の父

遥の母

マリア

義彦

ラーメン屋のおやじ

巡査

傘をさす妖精ーく3

グランマ

注意事項

(演出の領域に足を踏み込んでいるので、参考程度で)

- ・翔、翼、和子以外の役は五、十名くらいの役者が兼ねる。
- ・翔と翼は女性、和子は男性が演じるのが好ましい。
- ・基本、何も無い空間。中央にアクティングエリア、登場しない役者は後ろで半円をつくりアクティングエリアを囲む。残りの半円を観客が囲み、サークルを作る。
- ・SEは生音で。海のシーンは箱に小豆入れて波のように揺らし、雨のシーンでは団扇に玉をぶら下げ、パタと当てる。など。
- ・音楽はライブで演奏するのが好ましい。台本では楽曲を示していますが、この限りではない。
- ・幕は開いている。というか、基本的に無い。どこでも、屋外でも公演可能。客席の椅子が無くてもよい。
- ・衣装は基本、黒の上下。その都度、役に応じて着たり脱いだり。
- ・着替えや化粧などは、物語の進行に併せ、椅子に座りながらやる。従い、お客様に見えている形となる。
- ・役者は、舞台袖でやるような、水を飲んだりなど、個人的なことをしても構わない。スマホは不可。

小学校の教室。

翔が、コップを教卓の上に置く。

翔 (語り) こんにちは。(夜公演では、『こんばんは』) 僕は須藤翔といいます。この春、懐かしの母校に赴任して6年生を担当しています。これから始めるのは、いじめをテーマにした人権学習。最近気がかりなこと

があります。クラスの鈴木君がいじめられているんじゃないかと。鈴木君は女の子っぽい男の子です。掃除時間に鈴木君の机が運んでなかったり、鈴木君の方を見てにやにやしている子がいたり、嫌な感じです。

チャイムの音。

観客も生徒。

生徒一 起立。これから二時間目の学習を始めます。

生徒たち はい。

生徒一 礼。

生徒 お願ひします。

生徒一 着席。

翔 皆さんはいじめで自殺する子供の話を聞いたことがありますか？

生徒たち、頷く。

翔 でも、それはどこか別の世界の話だと思っている人が殆どだと思います。さて、ここにコップがあります。いじめで自殺する人の気持ちです。ここから水が零れたら自殺するとしましょう。この中に言葉のいじめが入ってきます。まだ、半分くらいで大丈夫です。ノートを破られたり、カバンを隠されたり、上靴に画鋏を

入れられたり、様々ないじめが入ってきます。

翔、コップを持つ。

翔 コップの水位はだんだん上がっていきます。暴力なども入って、もうぎりぎり表面張力で何とかもっています。ここで、溢れさせるのは？

翔、コップを教卓に置く。

翔 (語り) 今から二十年前、僕はそちらに座っていました。あの席を見ると、あの頃の僕がまだそこに座っているように錯覚に捕らわれます。二十年前、2003年、平成15年、この年、流行っていたものと言えは、

二人の男が突然、テツ&トモの「なんでだろ」と歌い、踊りだす。

翔 (語り) それから、こんな歌も。

女、出て来て、「世界に一つだけの花」を歌う。

翔（語り）当時の担任の弥生先生です。弥生先生は僕たち子供にも真剣に向き合ってくれる先生で、弥生先生に出会ったことで、僕は教師を目指すようになったのかも知れません。

翔、ジャケットを脱ぎ、弥生先生に着せる。

翔、後ろの椅子へ。

弥生先生、翔が教卓に置いたコップを手に取る。

弥生先生 ノートを破られたり、カバンを隠されたり、上靴に画鋏を入れられたり、様々ないじめが入ってきます。コップの水位はだんだん上がっていきます。暴力なども入って、もうぎりぎり表面張力で何とかもっています。ここで、溢れさせるのは……。

パーカーを着た翔が舞台中央に出て来る。

弥生先生は元の席へ戻る。

翔（語り）その頃、僕はどこにでもいる、無邪気な小学生でした。夢は陸上でオリンピックに出ること。お金持ちじゃないけど、パパとママ、そして弟との明るい家庭。尊敬する人はパパ。だって、パパは、僕たち陸上クラブのコーチ。インターハイにも出場した長距離選手。……そして悲劇は突然訪れる。その頃、夜になると、パパとママは寝室で密やかに話をしていた。パパとママは僕たち子どもに夫婦の醜い諍いのシーンを見せたくなかったのだろう。

須藤家。

食卓を挟んでパパとママが対峙している。

音楽「カルミナブラーナ」(オルフ)

ママ あなた結婚する前、何も言わなかった。

パパ 自分自身を理解していなかったんだ。

ママ 私を利用したのね。

パパ そうじゃない。

ママ 騙され婚ね。

パパ 君を愛していたのは確かだ。

ママ 過去形ね。

パパ 今でも愛しているよ。

ママ どういう意味の愛なの？

パパ もう一度やりなおすことは出来ないのか？

ママ どうやって？

パパ それは……。

ママ 見当もつかないし想像も出来ない。

パパ 子供はどうするの？

ママ もちろん、私が引き取るわ。そんなワケの分からないところに置いていけない。

パパ 子供は渡さない。

ママ 子供たちも私と暮らすことを望むと思う。

パパ あんな男を選ぶはずがない。

ママ 自分を見つめてみてよ。あなたよりずっとまともよ。

パパ まともって何だよ？。

ママ ……。

パパ な、聞いているんだよ。まともって何だよ？ 何だよまともって……。

音楽、高まって、

翔 (語り) 毎晩、こんな会話が繰り返された。僕はケンちゃんに聞いてみた。ケンちゃんはいつも一人で遊んでいた。ケンちゃんのパパとママは離婚していた。

ケンちゃんがスキップして遊んでいる。

ケンちゃん カレー、カレー、カレーにお肉が入ってた！

翔 ね、ね、ケンちゃん。

ケンちゃん 給食のカレー、美味しかったよね。やっぱり、給食のカレーはお肉だよね。(悲しくなり) うちのカレーにはお肉が入ってないんだ。お母に聞いたたらテストでいい点とったら入れてあげる、だって。僕、いつになったらいい点がとれるんだろう？

翔 ね、ね、そんなことよりケンちゃん、あの、ケンちゃんのパパとママって離婚したんでしょ。お母さんと住んでるんでしょ。

ケンちゃん そうだよ。

翔 パパとは会うの？

ケンちゃん 土曜日。二時から五時。

翔 何するの？

ケンちゃん 映画を観たり、買い物したり、あ、キャッチボールしたり。

翔 そうなんだ。

ケンちゃん、キャッチボールをする。

翔、それに付き合う。

ケンちゃん いくよ。(ボールを投げる) お父、一緒に暮らしている時は仕事が忙しくて、顔なんか見たことがなかった。でも、今は週に一度会えるから、離婚してラッキー！。ハハハ。カレー、カレー、今日も明日もカレー！。

ケンちゃん、行く。

翔 (語り) そして案の定……。

須藤家。

玄関。

ママ、翔と翼。

ママ もう、パパとはやっていけなくなったの。

翔・翼 ……。

ママ ごめんね。いつでも会いに来てね。

音楽。「亡き王女のためのパヴァーヌ」(ラベル)

ママ、行こうとする。

後ろ髪をひかれ、振り向く。

ママ、翔と翼へ駆け寄る。

二人をひしと抱きしめる。

翼「痛いよ、痛いよ。ママ！」

ママ、行ってしまおう。

翔（語り）ママはいったん田舎の実家に帰ることになった。僕たちも転校して友達と別れるのは辛く、やっていけなくなったパパと暮らすことになった。四人で旅行に行った時の写真がある。それを見ると切なくなる。あんなに仲が良かったのに、あの時の笑顔は何だったの？ 幸せと不幸せは、代わりばんこにやってくるって誰か言ってたけど、この悲劇がまだ幕開きに過ぎないことを思い知らされるのに時間はかからなかった。ああ、神様、僕たちはいったい何悪いことしたってどういうの？ これって何の罪なの？

須藤家。

居間。

翼、動物図鑑を見ている。

翔も机で勉強を始める。

翔 また、図鑑？

翼 うん。

翔 お前本当に図鑑好きだな。

翼 ねえ、お兄ちゃん、せいどういつせいしょうがいつて？。

翔 どうして、そんな言葉知ってんだよ？。

翼 友達がパパのことだって。

翔 相手にするな。

翼 ねえねえ、どういうこと？。

翔 ……パパは、体は男だけど、心は女なんだ。つまり、女なのに、おっぱいは無くて、ちんちんがある。

翼 体が男なら、心も男にすればいいのに。

翔 (少し考えて) 心に嘘は付けないんだよ。

翔 どういうこと？

翔 自分に置き換えてみい。スカート履きてーと思うか？ しゃがんでおしっこしてーと思うか？

翼 思わない。

翔 だろ。

翼 そうしてパパは、そんなふうになっちゃったの？

翔 後ろの人、黒板を持って来る。

翼 黒板を使い、赤ちゃんのちんちんから、男性ホルモンが出て、脳に信号が行くという、絵を描きながら説明する。

翔 難しいことはよくわからないんだけど、ざっくり言うとな、お母さんのお腹の中で、赤ちゃんが成長する時に、男か女に分かれるんだ。男だったら、おちんちんが出来る。そのおちんちんから、男性ホルモンと

いって、男になりなさいという、信号が脳に行くんだけど、パパみたいな人は、その信号がうまく働かなくて、心は女のまま生まれてきちゃうんだ。

翼 パパはどうして結婚出来たの？

翔 それはパパに聞いてみないと分かんね。

翼 レズビアンの人たちは？

レズビアンのカップル、前へ。

翔 レズビアンの人は、自分は女で、でも女が好きって人。

翼 ゲイの人は？

ゲイのカップル、前へ。

翔 ゲイの人は、自分は男で、男が好きなん。因みに男も好きだし、女も好きだって人もいて、バイセクシャルっていうんだ。

バイセクシャルの人、前へ。

翔 LGBTって言葉があつてな、Lはレズビアン。Gはゲイ。Bはバイセクシャル。Tはトランスジェンタ

ー。パパみたいな人を言うんだよ。人の数だけ性のあり方があるんだ。

LGBTの人たち、元の場所へ。

翼 じゃあ、僕、バイセクシャルだよ。卓也君も加奈子ちゃんも好きだもん。

翔 それとは意味が違う。

翼 どう違うの？

翔 好きと愛するとは違うんだ。翼が言っているのは、好き。

翼 じゃあ、愛するって？

翔 そうだな……。自分と同じように相手のことを大切に思うことかな。

翼 ふーん。お兄ちゃん、いろいろ詳しいね。

翼 図書館から本を借りて読んだんだ。家族のことをよく知っておきたかったから。それに……。

翼 それに？

翔 ぼくたちの身を護るためにも。

和夫、前へ。

化粧し、女装をしている。

和夫 もう直ぐごはん出来るわよ。

翔 あのさ、パパ。

和夫 ママでしょ。ママ。

翔 だから、やめてよ。女言葉とか化粧するとかさあ。

和夫 気にしない、気にしない。

翔 気にするよ。恥ずかしくて、外出られねーよ。

和夫 みんな違ってみんないいの。人は皆、もっともっと素敵なオンリーワンなの。さあ、出来たわよ。出前一丁。

和夫、お椀に入ったラーメンを持って来る。

翔と翼、勉強道具や凶鑑を片付ける。

翔 また出前一丁かよ。

和夫 何言ってるんの。野菜たっぶり、愛情たっぶりよ。

翔 もやしばかりじゃねーかよ。

翼 ねえ、ママは、何でママと結婚したの？

翔 ママがママと結婚出来るわけねーだろ。法律でそういうことになってんの。

翼 ママとママと……、あ！ ママはどうして前ママと結婚したの？

翔 だから、パパだったっーの。

和夫 それはね。その時は、まだ、男であることへの可能性にすぎっていたから。結婚して、子供が出来れば

本当の男になれると思ったの。それにね、周りから強く結婚を勧められていたから。

翔 それじゃあ、なに？ ぼくたちはパパが男になるために、生まれさせられたってワケ？

翼 前ママを騙したの？

翔 そんなだったら、初めから生んでくれなきゃ良かったんだ。

翼 え？ でも、お兄ちゃん、そうになると、僕たちここに居なくなっちゃおうよ。やだよ、そんなの。

翼、泣く。

翔 泣くな、バカ。

翼 だって……。

和夫 ママのこと、本当にごめんね。でも、その時はママのこと本当に好きだったの。愛していたの。これだけ信じて。

翼 自分のことを大切に思うようにママのこと大切に思ってた？

和夫 え？ お？ は？ た、大切に思ってた。

翼 大切に思っていたのなら、離婚なんかしねーと思うけど。

和夫 ……もし、どうしてもママと暮らしていけないのなら、前ママのところへ行ってもいいのよ。

翔 だってママ、僕たちを引き取ってくれなかったじゃない！

和夫 それは違うの。どうしても私が翔と翼と離れたくなかったから。

翔 それに、もうママ、別の人と再婚しちゃったし、勝手だよ。パパもママも。僕たちいったいどこに行けば

いいんだよ！

翼 お兄ちゃん。(鳴き声で)

翔 泣くなつて。こっちが泣きてーよ。(溜息)

和夫 ごめんね。(泣く)

音楽。「亜麻色の髪の乙女」(ドビュッシー)

和夫、行く。

翔と翼、前へ。

翼 ねえ、おにいちゃん、ママに会いにいこうよ。

翔 ……。

翼 ママ、いつでも会いに来ていいよって、言ってたじゃない。

翔 ママはもう別の人と結婚したんだ。その旦那さんと子どもと一緒に暮らしている。そんなところへ僕たちが押しかけてみる、せっかく掴んだ幸せが逃げちゃうだろ。

翼 でも、ママ、会いに来ていいよって。

翔 だから。

翼 ママに会いたいよ。

翼、泣く。

翔 バカ、泣くな。

音楽。「母と子の絆」(ポール・サイモン)

翔 (語り)と、言ったものの、僕もとても会いたかった。会いたくて、会いたくて、たまらなかった。ママの手の温もり、二日目のお肉の入ったカレーライスの味、朝早くから作ってくれた遠足のお弁当。嫌なことがあっても包み込んでくれる微笑み。ママの愛情に飢えていた。次の日、電車とバスを乗り継ぎ、隣町に住んでいるママに会いに行った。

翔と翼、電車とバスに揺られ、そして歩く。

音楽。「くるみ割り人形・行進曲」(チャイコフスキー)

前ママの家の庭。

前ママは洗濯物を干している。

その脇に子ども(ヒカル)が、ピエロの人形で遊んでいる。

翔と翼、それを、電信柱に隠れて見ている。

翔と翼、声をかけようとするが、声が出ない。

前ママ、ヒカルに声をかけて、奥に去る。

ヒカル、翔と翼に手を振る。(きつと、ママが持っていた翔と翼の写真を見てママの本当の子どもだと思
ったのだろう)

それにつられて、翼、手を振る。

刹那、お互い複雑な立場にいる者同士、共感が生まれる。

翔、ママを取られた気持ちで、複雑。

翔 ……行こう。

翼 え、もう行っちゃうの？

翔、翼が振っていた手を払い、後ろを向いている。

翼 ママ、元気そうだったね。

翔 うん……。 (淋しい)

翼 あの子、何年かな？

翔 さあ……。 (来なければ良かった)

ヒカル、駆け寄る。

ピエロの人形を差し出す。

翔・翼 ……。

ヒカル サークスに行ったの。

翼 泣いてるね。このピエロ。

ヒカル 女の子にお花を渡すんだけど、嫌われちゃうの。だから、涙が出ちゃうの。(涙を指し) ほらね。でも、ぼく、ピエロ好きだよ。ママに買ってもらったんだ。あげる。

ヒカル、ピエロを差し出す。

翔、同情されたと思い、さらに、泣いているピエロが自分に重なり、

翔 いらね！

と、翼が受け取ろうとしたピエロを取り上げて叩きつける。

凍り付いた沈黙。

三人 …… (呆然と、落ちたピエロを見つめている)

翼 お、お兄ちゃん、せっかくだから貰っておこうよ。

翔 いらね！

翔、一人、歩いて行く。

翼 ねえ、お兄ちゃん！

翔 いらねえつつつてんだろ！

翼 (ヒカルに) ごめんね。お兄ちゃん、最近、怒ってばかりなんだ。

翔、行ってしまふ。

翼 だから、許してやって。(ピエロを拾い) あ、そうだ。このピエロと僕の帽子、交換しよう。

翼、ヒカルに帽子を被せる。

ヒカル ……。

翼 もう一つ持ってたんの、帽子。

ヒカル ……。

翼 じゃあね。(手を振る)

ヒカル ……。(弱々しく手を振る)

翼、行く。

一人、取り残されるヒカル。
前ママ、来る。

ヒカル（帽子を）貰った。

ママ、ヒカルの帽子を見る。

ママ、全てを理解する。

前ママ 誰に？

ヒカル、指で方向を指し示すが、既に翔と翼はいない。
前ママ、必死に探すが、叶わず……。

音楽「アンダンテ・カンタービレ」（チャイコフスキー）

須藤家。

食卓。

和夫、食器を洗っている。

翔と翼、それを手伝っている。

翔、不機嫌。

和夫 ママね、名前変えようと思っているのね。
翼 どうして？

和夫 この前、病院へ行った時……。

和夫の回想。

病院の待合室。

看護師 須藤和夫さん。

和夫、躊躇している。

看護師 須藤和夫さん、いらっしやいませんか？

和夫 ……はい。

看護師 奥様ですか？

和夫 いえ、本人です。

看護師 和夫さんですけど。

和夫 だから、その和夫です。

看護師 この保険証、違いますね。

和夫 いえ、私のです。

看護師 はあ？ 保険証に男って。

和夫 戸籍上は男なんです。

看護師 この保険証、本当にあなたのですか？

和夫 はい、私のです。

看護師 他人の保険証を使うと犯罪になりますよ。

和夫、運転免許証を見せる。

看護師 免許証。なるほど、そういうことですか。大変ですね。でも、お綺麗ですこと。

回想終わり。

翔 名前って、勝手に変えていいの？

和夫 面倒な手続きしないといけないけど。

翔 面倒って？

和夫 変えたい名前の使用実績と診断書を家庭裁判所に出して証明できれば。

翼 ねえねえ、何て名前にするの？

和夫 和夫の夫を、子に変えて和子。

翼 かずこ……。

和子 これから和子って名乗るから、証拠を捨てないでね。

翔 例えは？

和子 会員証とか、友達からの手紙。これから宛名は『和子』と書いてもらうから。

翔・翼 ……。

和子 それからね、今日、実は会社でカミングアウトしたの。

翔 !

翼 カミングアウトって？

和子 ママの体は男だけど、心は女だっていうことを、会社の皆さんに宣言したんだ。そしたら……。

和夫の回想。

和夫の職場。

職場の人一 前々から気持ち悪いつて思ったけど、やっぱり。

職場の人二 これから、女子トイレに来るの？ 更衣室も一緒？ やだあ。

職場の人三 須藤さんって、子どもいたよね。

職場の人一、二 居た居た。

職場の人三 子供が可哀そう。

職場の人一 不幸よね。

三人 不幸よね。

職場の人二 きつとぐれるわよ。

三人 ぐれるわよね。

上司 あのね、須藤さん。そういう、なんつーの？ 個人的な難しいこと会社に持ち込んで欲しくはないんですわ。会社はですな、須藤さんを男として採用したんであって、それを、後出しじゃんけんみたいに、いまさら女でしたはないでしょ。

和子 仕事は、今まで通り、やりますから。

上司 なかなか、そういうわけにもいかんでしょ。女では。

和子 二十年間、勤めたんですよ。

上司 しかしねえ……。

和子 お願いします。

上司 無理だね。お客さんの手前もあるし。

和子 (溜息) 分かりました。

和子、行こうとする。

上司 あんたみたいなおっさんが、そんななりして世間を渡っていけるのかね？

和子「……（「おっさん」って言われたことに深く傷つく）

回想終わり。

翔 それで退職したわけ？

翼 カミングアウトして、アウトになっちゃたわけ？

翔 いやいや、カミングアウトというのはセーフとかアウトとかって話じゃなくて、あんまり人に知られたくないことを話すことだよ。

翼 じゃあ、僕もカミングアウト。冷蔵庫の一番奥に隠してあった、お兄ちゃんの東京バナナ食べちゃった。

翔 え、お前食べちゃったの？

翼 すっきりした。隠し事しているのって辛いよね。こういうことでしょ。

翔 そんなバナナ。

和子 ママ、決心したんだ。手術をしようって。

翼 手術って、病気？

和子 性別適合手術と言って、体も女にするのよ。

翔 って、ことは、

翼 おチンチン切っちゃうの？

和子 ママにおチンチンがある方が、おかしいでしょ。それにね、おっぱいも大きくなるいのよ。素敵でしょ。
翼 おっぱいって、どうやったら大きくなるの？

和子 ホルモン注射するの。

翼 ホルモン？（

翔 あ、翼、お前の頭の中の映像が見えるぞ。焼肉屋さんのホルモンを想像しているんだろ。

翼 ホルモンじゃないの？ てっちゃん？

翔 そんなことしたら、焼肉屋さん大騒ぎになるじゃないか。パパが言っているのは、女性ホルモン。別名エストロゲンを注射するんだ。そうすると男性はおっぱいが大きくなり、体型も女性っぽくなる。因みに女性ホルモン、別名テストステロンを注射すると、体型が男性っぽくなるんだ。

和子 さすが翔。よく知ってるわね。

翔 えっへん。ん？ いやいや、絶対いやだよ。

和子 ママの一生の夢だったの。自分に嘘をつけて生きていた、四十年間を取り戻すの。だからね、分かって。

お願い。

翼 嫌だ。チンチン切らないで。ホルモンを注射しないで。

翼、泣く。

翔「泣くな、バカ」

翔（語り） パパは手術した。二週間入院し、保険がきかない分、費用も結構かかったようだった。そして、手術を境に、パパは完全に女性になってしまった。

和子、翔に背を向け、歩き出す。
振り向き「バイバイ」する。

音楽「私のお父さん」(プッチーニ)

翔 パパ、行っちゃダメだ！ そっちはダメ！ ねえ、行かないで。お願い！

翔、和子の腕にすがり付くが、払われる。

翔、横臥。

翔、「はあ！」起き上がる。

翔 夢か……。

翔 (語り) ぼくは、知らない灰色の町に一人置き去りにされたような気がした。パパが写っている写真を全部破った。

翔、写真を破る。

翔　こんなもの、こんなもの、パパのバカ！

翔　（語り）それから僕たちは貧乏になった。翼は僕のお古ばかり着て、靴にも穴が開いていた。食べ物も、安く、嵩があつて、腹持ちのいいものが中心になった。明らかに保険のきかない、高額な手術代や治療費が影響していた。そして、想像していたことが現実になった。

音楽「ワルキューレの騎行」（ワーグナー）

翔と翼、武と子分のヤスとタツと向かい合う。

武　お前んちのとうちゃん、女だってな。

翔　！

ヤス・タツ　父ちゃん、おんな、父ちゃん、おんな。

武　父ちゃんが女ってことは、お前たち半分、女ってことだよな。

ヤス・タツ　半分、おんな、半分、おんな。

武　競技会に負けるのも無理ねーよな。男だと思っていたコーチが女なら。

翔　！

武　いいか。コーチに言っとけ。もうクビだってな。

ヤス・タツ　クビ、クビ。

翔 (翼に) 行こ。

翔、無視して行こうとする。

ヤス、行く手を阻む。

翔、別ルートで行こうとすると、タツが行く手を阻む。

翔、武にぶつかり、転ぶ。

翔、武を睨む。

武 なんだよ、なんか、文句あんのか？

翔 |。

翔、服についた泥を払い、立ち上がる。

武 あ、翼、お前のチンチンが、こんなところに落ちてるぞ！

翼 え！

ヤス・タツ 落ちてる、落ちている、落ちている、落ちてる！

翼、「落ちてる」と言われるチンチンを探す。

武 落ちてるわけねーだろ！

武、翼の尻を蹴る。

翼、前のめりになって、転ぶ。

翔 弟に手え出すな！

翔、武の手を取って投げ飛ばす。

武、飛ばされるが、ヤスとタツの手で作ったネットで、助かる。

武 手なんか出してねーよ。出したのは足だよ。

ヤス・タツ 武ちゃん、最高！

武 手え出すってのは、こういうことだ！

武、翔を殴る。

翔、ふっ飛ぶ。

翔 やったな！

翔、武の手を取って、投げる。

武、一回転し、元に戻り、翔を殴ろうとしすると、ヤスに当たってしまう。

武・タツ ヤス！

武、再び殴ろうとすると、手を取られ、タツを叩いてしまう。

武・ヤス タツ！

武 やったな！

武、翔を殴ろうとすると、手を取られ、キックの連打。

音楽。「天国と地獄」(オッヘエンバック)

翔、武の股間を蹴り上げる。

武 アウチ！

武、翔を殴ろうとするが、一瞬、翔が消える。

武？
翔 昇龍拳！

翔、下からアツパーカット。
武、鼻血が噴き出る。

ヤス・タツ 武！

武を連れて行くが、途中帰って来て、

ヤス「やりやがったな」

タツ「やりやがったな」

ヤス「びびってんじゃねーからな」

タツ「びびってんじゃねーからな」

と、かわりばんこに、翔に対峙するが、腰が引けている。

ヤス・タツ「やべえ」

弥生先生、現れて、

弥生先生 やめなさい！

ヤス・タツ はい。やめます。

ヤスとタツ、気を付け！ の姿勢で固まる。

武・ヤス・タツ 覚えてろよ！

三人、引っ込む。

音楽。「悲愴」(ベートーヴェン)

小学校。

相談室。

弥生先生、椅子を出して、座る。

翔、俯いている。

弥生先生 先生、翔君のお母さんから、お話を聞きました。

翔 パパから？

弥生先生 パパか……。まだ、複雑ね。両親が離婚しただけでも大変なのに、パパがママになるなんて、先生、

想像出来ない。ごめんね。でもさ、一番苦しいのは、翔君のお母さんじゃないかしら？

翔 パパ？

弥生先生 だって、想像してみて。翔君が髪伸ばしてスカートを履いたらどうなるか？

翔 ……。

弥生先生 周りから変な目で見られるし、喧嘩になるかも知れないわね。

翔 だから、それはパパの問題で……。

弥生先生 うん。翔君は悪くないよね。でもさ、親子って、いい事も悪いことも分け合うものなのよ。だから

家族なの。

翔 ……。

弥生先生 お母さんが不幸な時に、翔君、幸せでいられる？

翔 それは……。

弥生先生 家族ってね、辛いこと、悲しいこと、苦しいことを引き受けるものなの。

翔 ……。

弥生先生 お母さん、翔君と翼君のことを心配しておられました。自分のことでいじめられやしないか、偏見を持たれやしないか、バカにされやしないか、って。親ってね、自分のことより、子供のことを思うものなの。美味しいものを食べたら、子どもにも食べさせてあげたい。部屋のなかに危ないものがあれば、取り除

く。これは、親としての本能で、無意識の愛だと思うんだ。確実に言えるのは、世界一翔君のことを思っているのは、翔君のお母さん。そのことは分かってあげて。

翔 ……。

弥生先生 先生、翔君のこと信じている。

弥生先生、去る。

翔、立つ。

翔 そんなことより、問題はその日の夕方だった……。

上手に和子と翔が立っている。

下手に、武が椅子に座り鼻にティッシュを詰めている。

その後ろに武の父母。母、武の世話を焼く。

須藤家（和子と翔）

武の家（武と母と父）

和子「さあ、行くわよ」

武母「さあ、行くわよ」

翔「だから」

武「だから」

翔「僕、一人で誤りに行くから付いてこなくて

「いって」

和子「何、言ってるの」

和子「付いて来るのは翔の方でしょ」

和子「こういう時って、親がきちっと謝るものなの」

和子「そのための親なの」

翔「これじゃあ、笑われに行くようなもんだよ」

和子「怪我させてしまったのは事実なんだから」

和子「ママにまかせて」

和子「こういうのってさ、さっさと謝ってすっきりした方がいいのよ。ちよっとだけ、嬉しいんだ。ううん。翔がママのために喧嘩したことじゃないわよ。それは絶対やってはいけないこと。嬉しいのは、」

和子「翔のために、」

武「いって」

武母「何、言ってるの」

武母「こういう時って、親に謝らせるものなの」

武母「そのための親なの」

武父「子供の喧嘩だろ。大げさな」

武母「大怪我したのよ」

武父「鼻血が出ただけじゃないか」

武母「あんたじゃ、ダメ」

武母「ママにまかせて」

武母「嬉しいのは、」

武母「武ちゃんのために、」

和子「親じゃなければ出来ないことをやれるってこと」

和子「だから、大船に乗ったつもりで任せて」

翔「泥船だろ」

和子「何か言った？」

翔「いや、別に……」

和子「まず、ママが謝るから、翔ちゃんは、その後で『ごめんなさい。申しません』って」

和子「はい、練習」

翔「ごめんなさい。もうしません」

和子「もうちょっと感情を込めて！」

翔「ごめんなさい。もうしません」

和子「本番は、もっとテンションをあげて、感情を込めてね」

武母「親じゃなければ出来ないことをやれるってこと」

武母「だから、大船に乗った　つもりで任せて」

武「泥船だろ」

武母「何か言った？」

武「いや、別に……」

武母「あんた。むこうが謝っても許しませんからね。台詞の確認。『これは傷害事件です』」

武母「はい、練習」

武父「(やる気なく) これは傷害事件です」

武母「もうちょっと感情を込めて！」

武父「これは傷害事件です」

武母「本番は、もっとテンションをあげて、感情を込めてね」

和子「ちょっと待って、お化粧直す」

武母「ちょっと待って、お化粧直す」

和子と武母、向き合ってお化粧を直す。

武の家。

玄関。

和子と翔、玄関に立ち、

和子 ごめん下さい。

武父、武母に促されて、玄関へ。

武の父母が出て来る。

和子、いきなり土下座し、

和子 武君に怪我をさせて、申し訳ありませんでした。

翔、そんな和子の姿を見るのが辛い。

武の父、腰を下ろし、和子に話かける。

武父 いえ、頭を上げて下さい。悪いのはウチの子なんですから。

武母、武父を引っ張って立たせる。

和子 本当に申し訳ありませんでした。

和子、顔を上げる。

武父 ああ！（驚愕）

武母 きゃ！（驚愕）

武父 びっくりした！ 陸上クラブの須藤コーチ……、ですよね。

和子 はい。

武父 ど、どうしちゃたんですか？

和子 この度、女性になりましたので、よろしくお願いします。

武父 こちらこそ。よろしくお願いします。

武母 あなた！

武父 は？ あ、ちょっと待って下さい。女装ということですか？

和子 女性ですので、女装もします。

武父 何で、また？

和子 「何で、また」と言われましても。もともと女だったんです。

武父 今までが違ってたってことですか？

和子 本来あるべきところに戻っただけのことです。

武父 (合点がいかない) ……。

和子 まあ、そういうことなので。(武に) ごめんね。武君。

和子、翔の頭を下げさせて、

翔 すみませんでした。

和子 それでは、失礼します。

和子と翔、出ようとする。

武 コーチ！ もう教えて貰えないんですか？

和子 (振り向き) ……。

武 俺、どんなに頑張ったって、翔には勝てなかった。だから……。

和子 競技で負けたのなら、競技で勝つように努力しなさい。喧嘩をするのは、絶対ダメ。ちよっとバタバタしていたけど、またコーチに復帰するから、一緒に走ろう。

武 はい。

翔 ……。

須藤家。

食卓。

和子、「ラジオ体操の歌」を歌いながら、朝ご飯を作っている。
翔と翼、座ってあくびをしている。

和子 (歌う) 出来たわよ。召し上がれ。デリシヤス!

翔 パパ、朝からテンション高すぎ。

和子 ママでしょ。ママ。

翼 ママ、何かいい事あったの?

和子 分かる、分かる、分かる? そうなの。ね、ね、ね、聞きたい?

翼 聞きたい。

和子 翔ちゃんは?

翔 別に。

和子 そう、そんなに聞きたいのね。

翔 だから、聞きたくねーっの。

和子 聞かない人には朝ご飯なしね。ノンノン。

和子、食べ物を取り上げようとする。

翔 分かったって。はい、聞きたいです。

和子 では、ご要望にお応えし、謹んで申し上げます。

翼 謹んでお聞きします。

和子 あのね、近い将来『性同一性障害特例法』という法律が制定されるの。

翼 それって？

和子 戸籍の性別を変えることが出来るの。

翼 こせきって、化石の親戚？

翔 戸籍ってのはだな……。

和子 その人が、いつどこで生まれたか、親は誰なのか、結婚しているのか、子供は何人いるのか、ということが書かれているものなの。日本国籍を持っていることを証明する公文書だし、健康保険の資格だって貰えるものなのよ。

翼 へえ……。

和子 だからね、ママの場合、その性別、つまり男から女に変えたってことを、国からも社会からも認めて貰いたい。だって、体も心も女なのに、この生活している国の法律が、女って認めないのは変でしょ。

翼 変だ。

翔 そりゃ、そうだけど……。

和子 「これで、法律で認められ、心も体も社会的にも女になれる。誰にも文句は言わせない。会社とも争わなくてもすむ。誤解されることも、後ろ指さされることもない。翼や翔ちゃんだって、いじめられなくてもすむ。

トレビアーン」

和子、歌う。「ラジオ体操の歌の替え歌」(作、添谷泰一)

「新しい朝が来る 希望の朝が」

「喜びに戸籍を変えて うちわで仰げ」

後ろの人、うちわで仰ぐ。

「世間の声に 法律の壁を」

翼と二人の女性、ダンス。

翔、味噌汁を飲みながら立って見ている。

「この仰ぐ風で開けよ それ一、二、三、ダァ！」

和子 これ、もうパパなんて、言わせないからね。

音楽。「小さな恋のメロディ」(ビージーズ)

翔、リュックを背負い歩いている。
遥が追いかけてくる。

遥 翔君、待って！

翔、振り向く。

遥 一緒に、帰ってもいい？
翔 え？ うん……。

翔、胸に手を当て、

翔 (語り) 心臓の鼓動が高鳴っている。

心臓の音。

翔 (語り) どうなってんだ？ 憧れの遥ちゃんと、一緒に帰れるなんて……、ひよっとして…… (目が輝く)

遥 ねえ、

翔 はい！

遥 座って話さない？

翔 へ？ あ、うん。

ベンチに座る二人。

翔 (語り) これは、所謂、世間でいうところの、デートというものであるまいか？ デート、何たる甘美な響き……。

翔、白日夢状態。

遥、俯き加減で恥ずかしそう。

遥 ……あのね、

翔 (語り) 落ち着け。自分と同じように相手のことを大切に思ってるか？ (胸に手を当てる)。うん。思っている。ということは愛だ。愛はお互いを見つめ合うことではなく、ともに同じ方向を見つめること。(遥の方向と同じ方向を見て) 同じ方向を見ている。正真正銘、愛だ！

遥 翔君、聞いてる？

翔 はい！（夢から覚めるように）

遥 言い難いんだけど……。

翔 （語り）やっぱり、そうだ。言い難いのは、悪い点をとった時と、愛の告白だ。遥ちゃん、大丈夫だよ。

君の全てを受け止めるからね。ぼくの胸にどくと飛び込んできなさい。

膝をただして、受け入れ態勢を整える。

遥 翔君、

翔 はい。

遥 の、パパって、

翔 うん。

遥 ママになったんでしょ。

翔 はい？

翔、緊張の糸が切れ、おならが出る。

翔、おしりを押さえて立つ。

遥、鼻をつまんでいる。

音楽。「トツカータとフーガ」(バッハ)

翔 (語り) ショックだった。あまりのショックに、おならが出た。好きな人の前でおならが出たのはもっとショックだった。穴があったら入りたかった。で、穴を探したけど……。

翔、キョロキョロと穴を探している。

遥 翔君、

翔 はい。

遥 生きていれば、おならもするわ。そんなことより、

遥、ベンチの隣を指し、座ることを促す。

遥 パパがママになるって、大変なんでしょ。

翔 まあ……。

遥 翔君、そんな風にはぜんぜん見えないから。

翔 まあ……。

遥 フッフ。『まあ』しか言わないのね。

翔 まあ……、あ、いや……。

遥 実はね、私のお兄さんも、お姉ちゃんになったの。

翔 え？

遥 そう。性同一性障害者。お父さんもお母さんも、そんな兄さんのこと信じられなくて、ほら、うちってお寺でしょ。お父さん、お兄ちゃんにお寺継いで欲しかったから。お兄ちゃんのこと絶対認めないのね。檀家さんからの信頼みたいなものもあるし。

遥の回想。

遥、父、母が座っている。

父は僧侶で袈裟を着ている。

遥の兄、今はマリアが座っている。

遥の父 お前を女に産んだ覚えはない！

遥の母 生んだのはあたしですけど。

遥の父 今からでも遅くはない。そんな恰好はやめて、坊主になって、お寺を継なさい。お前は長男なんだから。

遥の母 もう手術もしているし。

遥の父 また、つけばいいじゃないか。

遥の母 そんなに、簡単にはいきませんよ。

そこへ一見して気障な男が来る。

若い男 ごめん、マリア！

遥の姉 あ、義彦さん。

遥の父 マリア……。

義彦 お父さん、お母さん、上田義彦といます。

マリア 近い将来、戸籍の変更が出来るようになるの。それを機に、義彦さんと結婚する約束しているの。
遥の父 結婚！

遥の父、気絶しそうになる。

遥の母 あなた、大丈夫？

遥の父 あまりの展開に眩暈がする。

遥の父、卒倒する。

遥の母 あなた、大丈夫？

義彦 マリア、実は話があるん。

マリア え？ どんな話？

義彦 悪い話と……、もっと悪い話、どちら先に聞きたい？

マリア どちらも聞きたくない。

義彦 じゃあ、悪い話からね。最初、うちの親、結婚してもいいって言ってたんだけど、孫の顔を見たい、孫を抱きたいって言いだしてね。

マリア え、そんな！ 義彦さんの気持ちはどうなの？

義彦 結婚したいと思っている。でも、廻りがうるさいんだ。親だけじゃなくて、親戚も猛反対でね。そんなことをしたら縁を切るって言いだす始末さ。

マリア じゃあ、二人で知らない土地に行って、そこで暮らそう。

義彦 そんなこと無理だよ。会社辞めなければいけないし、親とも縁を切らなければならなくなる……。

マリア 親と私とどっちが大事？

義彦 ここからもっと悪い話ね。結論から言うね。僕たちは結婚出来ない。僕は一人っ子で、江戸時代から続く造酒屋家の子々孫々、守らなければならぬんだ。

マリア じゃあ、どうして私と付き合ったの？

義彦 君の美貌に釘付けにされ、君の愛に溺れたのさ。

マリア 別れたくない。

義彦 半年もすれば、ぼくよりきつといい男が現れる。さよなら。

義彦、去る。

マリア 義彦さん、そんな！

マリア、義彦を追いかける。

遥の父 遥、お前、婿をとってお寺を継なさい。

遥の回想終わり。

翔 じゃあ、遥ちゃんが、お寺さん継ぐんだ。

遥 そうね、お坊さんのお婿さんが来てくれたらね。翔君、お婿さんになってくれる？
翔 はい、なります！

翔 (語り)と、言う言葉を舌のギリギリで呑み込んだ。

翔 ぼ、ぼくはオリンピックの選手になりたいから。

遥 そうね。翔君はオリンピックね。
翔 あのさ、お兄さんのこと気持ち悪いと思う？

遥 初めはちょっとね。でも、今は全然。優しいし、綺麗だし、町を歩けば、男の人が振り向くんだもの。私にとっては、素敵なお姉さん。

翔 お父さんは、今でも？

遥 うん……。でも、いつかきつと、お姉さんのこと認めてくれると思う。だって、お姉さんの人生は、お姉さんのものなんだもの。

翔 お姉さんの人生はお姉さんのもの。パパの人生はパパのもの？

遥 うん。だからね、翔君も理解してあげて。明日の町内運動会でまた会おう。じゃあね。

遥、走って行ってしまふ。

翔 あ、忘れていた！ 恐怖の町内運動会！

翔 (語り) パパは子供のころから運動会が大好きで、というか、自己の存在をアピール出来たのは、運動会しかなかったようで、異常なくらい情熱を燃やす。あの格好で競技に出るに違いない。ヤバイ！ そして情け容赦なくその日はやってきた。

音楽。「道化師のギャロップ」(カバレフスキー)

小学校。

校庭。

和子、周囲から、好奇心な目で見られている。

弥生先生 いよいよ最後の競技、家族リレーです。

和子 翔ちゃん、行くわよ！

翔 あちゃ。

和子 小学校最後の記念として、翔ちゃんからバトンを貰いたいの。

弥生先生 バトンは子供のアンカーに渡りました。

翔と武、デッドヒート。

弥生先生 南町の山田武君が一位です。それを追う、西町、須藤翔君。二人のデッドヒートです。熾烈な一位争い！

翔、武を抜く。

弥生先生 (放送) あ、翔君、武を抜きました。一位は西町です！

和子 ここよ！ 翔！

翔 ママ！

ここからスローモーションになる。

翔 (語り) え? 『ママ』? パパじゃなくママ?

その瞬間、翔、バトンを落とす。

翔 あ!

弥生先生 あ、西町バトンを落としました!

翔、バトンを拾い、和子に渡す。

和子、走り出す。

武の母に抜かれる。

弥生先生 アンカーにバトンが渡りました!

和子、失点を取り戻すが如く、必死の形相で走る。

弥生先生 (放送) あ、西町、早い! 西町、須藤君のお母さん、早い! 早い! 一位は南町か西町か!

和子、ギリギリでテープを切る。
ピストルの音、「バン！」

弥生先生 (放送) (興奮して) 大逆転です。西町が一位です。西町が総合優勝です！ やった！

観客が、不正があったと、町内会長に詰め寄っている。

観客一 (男) 父親が母親に化けて走ったのが、不正じゃなくて、何なんですか！

町内会長 まあまあ……。

観客二 (女) あんな破廉恥なことまでして、一位になりたいのかしら？

町内会長 落ち着いて。

弥生先生も加わり、止めようとする。

観客三 (男) オリンピックに男が、女の競技に出られますか？

町内会長 そりゃ……。

観客四 (女) 子供の教育にもよくないわ。

弥生先生 まって下さい。翔君のお母さんは、女性です！。

観客二（女）　ちよっと前までは、男だったんでしょ。こんなのインチキです。

観客三（男）　一位は取り消しです。優勝も取り消しだ！。

町内会長　（諦め）分かりました。

町内会長、マイクを持って、

町内会長　（放送で）ただいまの協議の説明を致します。西町が一位で優勝しましたが、不正がありましたので、西町を失格とします。従って、優勝は南町とします。

会場、どよめく。

和子、しゃがんで泣く。

翔　（語り）これじゃあ、パパが惨めだった。僕のために、一生懸命走ってくれたのに。

武が、校長のマイクを奪う。

町内会長　な、何だ？　君たち！

武　違うと思う！

翔　た、武……。

遥 武君、マイク貸して。

翔 遥ちゃん……。

遥 翔君のママは立派だと思います。性別を変えるのは、廻りから差別を受けるけど、翔君のママはこうして、人前に出て胸を張って戦っています。

武 マイク、貸して。皆さん、聞いて下さい！ 翔君がバトンを母さんに渡すとき、『ママ』と言ったんです。

『パパじゃなくてママ』って言ったんです。翔君が、パパと言ったら西町は不正だと僕は思います。でも、ママと言ったのなら、不正じゃないと思います。だって、自分の親をパパかママを決めるのは子供だからです。翔、どっちなんだよ？ パパかママか？

武、翔にマイクを突き付ける。

翔 ……。

武 パパかママ？

翔 ママだよ！ ママはママだよ！

和子 翔、ありがとう……。

会場から、拍手。

音楽。「ローズ」(アマンダ・マクブルーム)

翔 (語り) 不正は取り消され、西町は優勝した。僕にとって、パパがママになった日、それは運動会だった。ママはそれからも、PTAの会合、学校の行事など母親として参加した。おそらく、好奇心目で見られたに違いないのだけれど、そんなこと一言も愚痴らなかつた。子供会でバーベキューをした時、ママは自分から他のママに話しかけていた。なかにはあからさまにママを避け、陰でこそそそ言っている人もいた。ママがそのことに気づいてないはずはなかつたけど、ずっと背中を伸ばして笑顔でいた。僕はそんなママをカッコいいと思った。そして、僕がママを守らなきゃ、何故かそんなことも思った。それから、何事もなく、日々が過ぎていった。

須藤家。

食卓。

和子がテーブルに突っ伏し、泣いている。

翔が入ってくる。

翔 どうかしたの？

和子 (泣き声) 起こしちゃった？

翔 まあ……。

和子 ごめんね。何だか、涙が出て、止まなくなっちゃって。(笑って、ごまかそうとするが、)
翔 ぼくで良かったら、聞いてあげるよ。

和子 もう、いつから、そんなにやさしくなったの？

翔 ママの息子だもん。

和子 (少し笑う) あのね……。

翔 うん。

和子 会社、くびになっちゃった。

翔 え？ ほんと？

和子 性別が変えられなかったから、嘘つき呼ばわりされてね。

翔 どういうこと？

和子 戸籍をね、変えられなかったの。

翔 え！ どうして？

和子 ママは戸籍を変えていい条件に該当しなかったの。一番肝心な、法律がママを女として認めなかったの。

ああ、悔しい……。 (激しく泣く)

翔 ママ……。

翔 (語り) ぼくは早速、インターネットで探し、読んだ。

プリンターから紙が出て来る。

それを取る翔。

翔が読み、翼が聞いている。

翔 第一条。この法律は、性同一性障害者に関する法令上の特別の取り扱いの特例について定めるものとする。
それで問題は、この三条。性別の取り扱いの変更の審判。（文章を読む）家庭裁判所は、性同一性障害であつて、次のいずれにも該当する者について、その者の請求により、性別の取り扱いの変更を審判することが出来る。

翼 どういうこと？

翔 ママは女になったんだからさ、戸籍の性別を男から女に変えて貰おうと思ったんだ。ところが、ママの場合、その条件に当てはまらなかった。

翼 って、どんな条件？

翔 その一。医師の診断を受けていること。

翼 ママは手術をしたんだから、お医者さんに診て貰ったんでしょ。

翔 うん。だからこれは、OK。次、二十歳以上であること。

翼 ママって何歳？

翔 四十歳。

翼 これも、OKだね。それから？

翔 性別適合手術を受けていること。これもOK。

翼 それから？

翔 結婚していないこと。

翼 ママって、離婚したんでしょ。

翔 だから、これもセーフ。

翼 やったあ！ 次は？

翔 現に子がいないこと。

翼 現に……。

翔 ママに今現在、子供がいないということ。

翼 子供って、僕たちのこと？

翔 子供って、ぼくたちのこと？

翔 うん……。

翼 ぼくたちがいなくなれば、ママは法律で、女って認められないわけ？

翔 そう。

翼 それって、ぼくたちが死ねばいいってこと？

翔 「そうかも……。

翼 いやだ。ぼく死にたくない。(涙声になる)

翔 バカ、泣くな。

翼 だって、お兄ちゃん、死んでもいいの？

翔 いやだよ。ぼくだって。

翔、紙を丸めて、投げ捨てる。

翼 どうすればいいの？

翔 分かんねーよ。そんな難しいこと。

翼 そんな……。 (泣く)

翔 (語り) 僕たちがこうして生きていること。これがママの希望や願いが叶えられない原因になっていた。

この法律では、僕たちの存在を消さなければママの希望は叶えられない。ママの涙は、雨になり僕の頭上に振り続いた。

後ろの人が手にした傘を開き、傘を回しながら翔に近寄る。

その中に、おばあさんがいる。

翔 (語り) 雨のあとの綺麗な虹が見たかったが、雨は止まなかった。それどころか、大量の雨が流れ込み、水位はみるみる上がり、洪水になった。僕は流されないように足を踏ん張っているが、もう限界だ……。

傘を廻していた人達去る。

おばあさん(グランマ)だけ残り、が傘を差し出す。

グランマは、一見して破天荒。

翔 (空を見上げる) 止んだ……。

波の音。

グランマ残り、翼と花札をしている。

グランマ 花見で一杯。

翼 月見で一杯。

グランマ 猪鹿蝶！

翼 やられた。グランマ、強いね。

グランマ そりやそうさ。年季が違うからね。

翔 (語り) ママは僕たちを連れて、ママのママ、つまり僕たちのおばあちゃんの家に来てってくれた。おばあちゃんは海沿いの家で、一人で暮らしていた。パンクババあとあだ名され、親戚筋から一目置かれていた。おばあちゃんと会うのは5年ぶりくらいで、女になったママ、つまり息子から娘になったママとは初めて出会ったんだけど、まったく動じなかった。さすがグランマ。ママは海を見に行くと言って出かけた。

翼 お兄ちゃんも入んなよ。面白いよ、花札。

翔、加わる。

翼、札を配る。

やりながら、

グランマ いつか、こんな日が来ると思ってたんだ。

翔 こんな日って？

グランマ 息子が娘になる日。

翼 パパがママになる日？

グランマ そう。結婚して子供が出来た時は、心配は杞憂だったんだと思ったんだけどね。翔ちゃんも翼ちゃんも大変だったね。……子供の頃から、薄々は気が付いていたんだ。スカート履きたいとか、ままごとしたいとか、隠れて口紅塗ってた時もあったからね。

翔 ママが……。

グランマ ここは噂話が次の日には住民全員に知れ渡るほどの田舎だし、今じゃ、そういうタレントさんがテレビに出ているけど、当時はまだまだ理解がなくてね。今思えば、和夫も辛く苦しかったんだと思う。なにしろ、お父ちゃんは漁師で、ヤクザでもぼこぼこにするくらい気性が荒かったから、息子が女っぽいのは、天地がひっくりかえっても、受け入れられなかったんだ。男の中の男の世界だからね。だから喧嘩のやりかた教えたり、剃り込み入れて、パンチパーマにさせたり、馬鹿だよな。

翼 あのさ、おじいちゃんって、ヤクザぼこぼこにしてたの？

グランマ そうだよ、若い時からね。悪いことする奴は、許せないんだ。そこに惚れたんだだけだよ。あたしも馬鹿だよな。

翼 おじいちゃんってどうして死んだの？

グランマ 嵐の日、仲間の船が遭難して、それを助けに。体張って止めたんだけどね。『仲間が危ない！ 助けるから待ってる』って……。それで船がひっくり返って、それっきり、死体も上がらなかった。(グランマ、思考が虚空を彷徨う) あ、用事思い出した。

グランマ、出て行く。

翔 (語り) それから大変だった。詳しくは教えて貰えなかったけど、ママは崖から海に飛び込んだらしい。グランマが言うには、僕たちとおじいちゃんの話をしている時、何故か頭の中におじいちゃんが現れて、こう言ったんだって。『和夫が危ない！ 助けるから待ってる』って。それで、グランマは船を出して、波間に浮かんでいるママを見つけた。そして病院へ。

病室の前。

椅子に座っている、グランマと翔と翼。

翼 (後ろを向いて) ママ、大丈夫かな？」

グランマ 大丈夫。二、三日、入院した方がいって先生が。

翼 グランマってさあ船、操縦できるの？

グランマ 出来るよ。因みに飛行機の運転免許のことを技能証明っていうんだけど、持ってるよ。

翼 じゃあ、船も飛行機も操縦できるの？

グランマ あと、大型バイク、乗馬も出来るし、カヌー、スケボー、マウンテンバイク。

翼 凄い！ 何でも操縦できるんだね。

グランマ 唯一操縦出来なかったものは、和夫かな？

翼 ママ？

グランマ ま、息子と言えども人間だからね。人間を操縦するなんて出来なし、してはいけないこと。おじい

ちゃんのをあとを継いで漁師になるはずが、高校卒業と同時に家を出て、それっきり。名前や性別まで変えて

……。

翔 (語り) グランマが出ていったあと、何気にグランマの寝室に入ったんだ。そこにはママからグランマへ

の手紙があり、封がしてなかったし、気になって読んだ。そこにはこう書いてあった。『おかあさん、わがままで、ごめんなさい。翔と翼をお願いします』って。最初、意味分かんなかったけど、今となれば……。

翼 グランマ、また来ていい？

グランマ いつでもおいで。今度は四人で麻雀やろか。面白いよ。

翼 やろ、やろ。教えて。

グランマ テンホウ、ダイスーシイ、スーアンコウ、ダイサンゲン、チューレン……。

翼 麻雀もいいけど、出来たら、船の操縦を教えて。

グランマ それは翼が二十歳になってからね。

翼 僕が二十歳になる時って、グランマ何歳？

グランマ 八十……、あ、そうか。この世にいないのかも知れないね。

翼 グランマは死なないよ。百五十歳くらい生きられるよ。だってスーパーグランマだもん。
グランマ そうかね？

翼 スーパーグレートファンタスティックグランマだもん。

音楽。「トゥルー・カラーズ」(シンディ・ローパー)

翔 (語り) おそらく翼は、ママが自殺未遂したなんて知らないだろう。グランマも教えて、そのことには触れないでいた。砂浜を散歩していたママが、波にのまれ、グランマが助けた。今はこれでいいと思った。

翼とグランマの笑い声。

窓からの満月が。

翼 月が綺麗。あ、流れ星！ 願い事、願い事！

と、三人、願う。

翼 お兄ちゃんは、何お願いしたの？

翔 早すぎて……。

翔 (語り) と、ごまかしたけど、本当はママの希望が叶いますように。と願ったんだ。だけど、何故か言えなかった。

翔 翼、お前は？

翼 僕はね、咄嗟だったから、思わず変なこと願ったんだよね。

翔 何？

翼 回転寿司食をお腹一杯食べさせてくれ。って。グランマは？

グランマ 宇宙飛行士になりたい。

翼 宇宙飛行士？

グランマ JAXA(ジャクサ)が宇宙飛行士募集していて、何回も受けたんだけど、受かんなくてね。でも、宇宙に行きたいんだ。そして地球を見たい。

翼 さすが、グランマ。

グランマ 一回だけの人生だからね。宇宙飛行士になったあかつきには、流れ星をとって来て、プレゼントしてあげるね。

グランマ、星を取る仕事。

グランマ はい、手を出して。

翔と翼、手を出す。

グランマ 流れ星のかけら。

翔と翼に握らせる。

翼 あ、あめちゃん！ ファンタスティック！ グランマ！

音楽。「星に願いを」(リー・ハイライン)

翔 (語り) それからもママは夜中になると一晩中、泣いていた。

ママ、机に突っ伏して泣いている。

翔 ママの鳴き声はぼくの胸にナイフを突き立てた。そして、ぼくはある計画を実行することにした。

須藤家。

食卓。

テーブルに、翔のリュック、貯金箱がある。

翔、手紙を書き上げ、手に持って読む。

それを落胆した表情で見ている、翼。

翔 「ママ、ごめんなさい。僕たちは居なくなります。探さないで下さい。ママは戸籍を変えて幸せになって下さい。さようなら」と、これでよし。

翔、貯金箱からお金を出し、リュックのポケットにねじ込む。
リュックを背負い、

翔 行くぞ、翼。

翼 ぼく、やだよ。

翔 翼、ママのこと好き？。

翼 好きだよ。

翔 ママのこと、幸せにしたい？

翼 したい。

翔 ママな、毎日一晩中、泣いてんだから。

翼 本当？

翔 本当だよ。

翼 ママ…… (泣く)

翔 泣くな。

翼 だって……。

翔 だから。

翼 分かった……。

翔と翼、歩き出す。

お寺。(「ゴーン」と鐘の音)

木魚の音。

小さく「般若心経」を唱える声が聞こえる。

遙が、箒で庭を掃いている。

それを、翔と翼が垣根から覗いている。

翔 遙ちゃん、さよなら……。

音楽。「別れの歌」(ショパン)

遙、何かを感じて、辺りを見廻す。

翔と翼はもういない。

遙、首を傾げ、再び箒で掃く。
通りを歩く翔と翼。

翼 お兄ちゃん、お腹減った。

翔 うん。何でも食べてえもん、言ってみい。

翼 回転寿司！

翔 言うと思った。じゃあ、回転寿司食べよう。

翼 やった！ イクラ、アワビ。

翔 甘えび、大トロ。

翼 かに、ホタテ。あつた！ 回転寿司！

翔 翼よ、あれが回転寿司の灯だ。

回転寿司の店の前に立つ、二人。

後ろの人たち、翔と翼の内側を廻り、寿司のネタになり、回転寿司を演じる。

回転寿司 「たまご、イカ、タコ、アワビ、甘えび、大トロ、ホタテ」

翼 ようし！ イクラをタブレットで注文だ！

新幹線がイクラを運んで来る。

新幹線「おまちどう！」

翼 わあ、たまらないね。

翔 ああ、よだれが。

回転寿司たち、後ろへ。

翼の、幻想だった。

翼 お兄ちゃん、本当に大丈夫？

翔 大船に乗ったつもりで……、あれ？

翔、リュックのポケットに手を入れるが、穴が開いている。

翼 あ……。

翔 ごめん。ごめんな、翼、本当にごめん。(涙があふれて来る)

翼 お兄ちゃん、泣かなくてもいいよ。僕も少し、持っているから。

翼、ポケットから、五百円玉を出す。

翼 ほら、五百円。これで、何か美味しいものを食べよう。あ、ラーメン屋さん、五百円のあるかな？

場末のラーメン屋。

オヤジが一人でやっている。

翔と翼、のれんを払って、店内へ。

翼 オジサン、五百円のラーメンってある？

ラーメン屋のおやじ 一番安いのが六百円だね。

翼 オジサン、相談んだけどさ、麺を二百円分減らしてよ。

ラーメン屋のおやじ え？ 百円分じゃなくて？

翼 うん。二百円分。で、大盛にして。

ラーメン屋のおやじ は？

翼 (壁のメニューを指し) ほら、大盛プラス百円って。はい、五百円。

翼、五百円玉を渡す。

ラーメン屋のおやじ、何となく納得できないが、ラーメンを作る。

翼 楽しみだね。

翔 ……。

ラーメン屋のおやじ、ねぎを切り、麺を茹で、麺の湯を切り、スープの入ったどんぶりの中に麺を入れ、具を乗せる。

ラーメン屋のおやじ へい、おまちどう。

どんぶりの中に、おやじの指が入っていた。

おやじ、その指を舐める。

翼 多分、普通のラーメンより多いよ。

翔 翼、お前、賢いな。

翼 「お兄ちゃんほどでもないよ。

翔 美味しそう。

翼 お兄ちゃん、食べなよ。

翔 お腹一杯だから。

翔の腹「ぐぐ」と鳴る。

翼　じゃあ、こうしよう。こっちは、兄ちゃんの陣地で、こっちは僕の陣地。チャーシューが、一枚かあ……、
（ラーメン屋のおやじを意識して）この美味しい一枚のチャーシューを目の前にして、僕は断腸の思いで我慢するからお兄ちゃん食べなよ。（少し涙ぐむという演技）

ラーメン屋のおやじ、それを察し、

ラーメン屋のおやじ　チャーシュー一枚、おまけ。

翔・翼　あざーす。

翼　メンマは三つだから……。　（ラーメン屋のおやじを見る）

ラーメン屋のおやじ　メンマ一枚、おまけ。

翔・翼　あざーす。いただきまーす。

翼　フッフ。（食べる）美味しいね。ラーメンってこんな味だったんだ。

翔　三日に一度は出前一丁だったからな。

翼　僕、出前一丁も好きだけどね。

むさぼり食べる。

あっという間に食べ終わり、

翔・翼　ごちそうさまでした。

ラーメン屋のおやじ あざす。

ラーメン屋のおやじ、首をひねる。

音楽。「ソルヴェイグの歌」(グreek)

翔と翼、歩く。

翔 (語り) そして、僕たちは海まで歩いた。

海。

砂浜。

波の音が聞こえる。

翔と翼、砂浜に座って海を見ている。

翼 キラキラと輝いて綺麗だね。

翔 うん。

翼 夕陽って、こんなに綺麗だったっけ？

翔 ここが海だからさ。(立つ)「海よ、僕らの使う文字では、お前の中に母がいる」

翼 何、それ？

翔 有名な詩人の言葉。

翼 へえ。

翔 なあ、翼、このまま、まっすぐ海に入ったら、死ぬかな？

翼 たぶんトンカチの人はね。

翔 それを言うのなら、カナヅチだろ。

翼 僕、嫌だよ。死ぬの。

翔 僕だって嫌だよ。

翼 じゃあ、何でそんなこと言うの？

翔 (座る) ママな、自殺しようとしてたんだ。

翼 嘘だ。

翔 本当だって。毎晩、一晩中泣いてんだから。ママが死ぬのやだろ。

翼 うん……。

翔 法律が認めないってことは、ぼくたち、捨てられたってことだからな。

翼 やっぱり、死んじゃうんだ。

翔 (立つ) 僕が先に行くから、後でお前入れ。

翼 やだよ……。

翔 じゃあ、一緒に入ろう。

翼 分かった……。

翔と翼、立ち上がり、手を繋ぎ波打ち際まで行く。
波の音、一際大きく。

翼 死ぬって苦しい？
翔 死んだことねえから、わからねえよ。

翔と翼、波に足を沈める。

翼 冷たい！ これじゃあ、死んじゃうよ。
翔 だから、死ぬんだよ。
翼 ねえ、今度にしない？
翔 もう、お金もねえし。

翔と翼、腰まで水に浸かる。

音楽。「はげ山の一夜」(ムソルグスキー)

翼 ねえ、お家に帰ろう。

翔 もう、帰るところねえもん。
翼 ……。

翔と翼、胸のところまで水に浸かっている。

翼 お兄ちゃん、怖いよ！（泣く）
翔 僕だって、怖ええよ！（泣く）

波が二人を飲み込む。

和子が必死に探している。

前ママも加わる。遥と武も加わる。

和子 翔ちゃん、翼！

遥 翔くん！

武 翔、翼！ 畜生！

四人、集まり、「見つからなかった」と。
再び探しに行く。

翔と翼、ずぶ濡れで歩いている。

懐中電灯を持った巡査が、通りかかる。
すれ違い、巡査、振り向く。

巡査 君たち、もしかしたら、須藤君？

翔・翼 ……。

巡査 お母さんが、探してるよ。

翔・翼 ママ……。

交番。

巡査が翔と翼に事情を聴いている。

蒼白な和子が入って来る。

そのあと、前ママも。

翔 ママ、ごめん。

和子 ……辛く苦しかったのよね。それを作ったのは私よね。……ママは自分のことしか見えなかった。もう、戸籍なんかどうでもいい。翔と翼がそばにいてくれたら、それでいい。ただそれだけで……。 (言葉にならない)

音楽。「ハレルヤ」。(レナード・コーエン) (詩、添谷泰一)

「涙の雨が 降り注ぐよ」

「傘もなければ 屋根もない」

「僕にできることは」

「ずぶ濡れの君に」

「手を指し伸べるだけ」

「ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ」

「いつかきつと 雨が止んで」

「綺麗な虹が かかるよ」

「その時 僕たちは」

「鎖から解き放たれ」

「自由を手にする」

「ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ」

現在。

元の教室。

弥生先生が、教卓の上のコップを手に持ち、授業をしている。

弥生先生 ……ノートを破られたり、鞆を隠されたり、上靴に押しピンを入れられたり、さまざまないじめが入ってきます。だんだん、コップの水位は上がってきます。暴力なども入ってきて、もうギリギリ、表面張力で何とかもっています。ここで溢れさせるのは……。

パーカーを脱いだ翔、弥生先生のそばに行く。

弥生先生、ジャケットを脱ぎ、翔に着せる。

弥生先生と翔、目を合わせ、うなずき合う。

翔 そう、たった一滴でいいのです。君たちの何気ない、『臭い、きもい、うさい』のたった一言で、人は死んでしまうのです。

生徒たち、聞いている。

翔 実は私の母親は、前は父親でした。性転換手術をして女性になり、母になりました。最初は混乱しました。でも、母は、必死で私と弟をシングルマザーとして育ててくれました。そして、愛してくれました。愛することの大切さを教えてくれました。辛くて、苦しくて、死にたいと思ったこともありますが、そんな時、いつも笑顔で、美味しいものを作ってくれました。そして、僕たちの悩みを必死で聞いて一緒に悩み、時には一緒に泣いてくれました。今、私はこうして皆さんを前にして授業をしています。これも母がいてくれたからです。母は男から女に戻りましたが、戸籍の変更は認められませんでした。そのことで、酷い偏見や差別

を受けました。偏見を持つ心がいじめにつながります。いじめの心は人の弱さに忍び込み、人間が人間であるためのものを蝕んでいきます。いじめをする人は悲しい人です。先生は、いじめの心と戦って、しない人、いじめが有ったら止める人を尊敬し、かっこいいと思います。いじめは、いじめた方も、その後、傷つきまします。自分の命を大切にして下さい。そして、周りの人の命も大切にして下さい。たった一言で、人が死んでしまうこともあります。たった一言で救われることもあります。僕が父のことを母として受け入れられることが出来たのも、友だちの一言が背中を押してくれたからです。そいつ初めはひどいいじめっ子だったんだけどね。僕と母のために、大人たちに『違うと思う!』って、言ってくれたんだ。僕に勇気をくれたその友達は、今は親友です。

佐藤、手をあげ、

佐藤 先生!

田中 やめろよ、佐藤君。

佐藤 ぼくは、鈴木君を、

山田 (前の佐藤のセリフを遮って) あれは、いじめじゃないよ。遊びだよ。(鈴木君へ) な、そうだよな、鈴木君。

田中 だって、鈴木君って、女の子ぽくて、きもいんだもん。

鈴木 ……。

佐藤 だから、それがいじめなんだって。かっこ悪いんだよ。

田中・山田 ……。

佐藤 いじめているときは気が付かなかったんだけど、後で考えると、不安におびえてやるんだ。先生が言ったように、自分が弱いからいじめるんだ。だから、鈴木君、ごめん。

田中・山田 ……。

佐藤 お前らだって分かってるだろう！

田中・山田 鈴木君、ごめん。

鈴木 うん。

チャイムが鳴り、授業が終わる。

翔（語り）それからのことを少し話そう。僕たちを苦しめていた特例法は2008年に改正され、『現に子がないこと』が『現に未成年の子がないこと』に変わった。しかし、それからまだ現在まで改正されていない。あれから十三年待って、翼の二十歳の誕生日に母は戸籍を変更した。その日のことはよく覚えている。雨の日、三人で家庭裁判所に行き、戸籍変更の申立書を提出した。帰りに三人で川沿いの道を歩いていると、

三人で、川沿いの道を歩いている。

翼 雨、止んで良かったね。

翔 うん。

翼 あ、見て！ 虹！

和子 綺麗ね。

翔 (語り) その虹は、僕たちの門出を祝福しているような気がした。

翼 虹の根っこの町って、僕たちの町があるところだよな。

翔 ほんとだ。

翼 僕たちは、虹のかけ橋で、何かに繋がっていることだよな。

翔 (語り) 『繋がっている』という言葉が何故か、胸に落ちた。あれから母は心機一転勉強して、看護師になった。逼迫している医療現場で、必死に働いている。そんな母を僕は尊敬している。因みに翼は医学の道を歩んでいる。母の後ろ姿を見て育ったのが影響していると僕は密かに思っている。今日は母の誕生日。今はバラバラに暮らしている三人が、この日ばかりは集まって食事しながら近況を語り合う日だ。そして、」

翔と翼、母に花束をプレゼントする。

翔・翼 ママ、お誕生日、おめでとう。

翼 いつまでも、元気で。

和子 ありがとう。

翔
（語り）さて、ここでこの物語に幕を下ろすことにしよう。未来は今より、良くなっていることを願って。

後ろの人たち、レインボーフラッグで虹を作る。

音楽。「オーバー・ザ・レインボー」（ハロルド・アーレン）

おしまい。